「違いを認める」ことから始めよう　　主幹教諭　古賀　旭

私は学校が好きである。小学生のころから学校に行くのが楽しくて、おもしろくて。片道 40 分の道のりを毎日元気に歩いて（小走りで？）通っていた。学校の先生になりたいと思ったのは小学 5 年生のころ。自分が好きな学校で働けると幸せだろうなと思い、そこから一途に夢を追いかけ、大学卒業と同時に教員人生をスタートさせた。

なぜ学校が好きなのか。一つの理由として「色々な人たちが集まっているから」ということがある。1 人の時間が嫌だったわけではない。けれど、学校に登校してあいさつを交わした時、休み時間友達と遊ぶ時、問題を出し合う時、共に部活動で汗を流す時…、1 人では経験でいない発見やおもしろさがあった。そして、自分とは違う感覚や考えをもっている人たちと交流することが楽しいと感じていたし、今もそれが学校や社会にとって大切なことだと思っている。

今も昔も問題となる、いじめや差別、悪口、仲間外れ…このような人間の醜い行動は、「違いを認められない」という所に根本的な原因があるように感じる。「私が正しい」「私たちが普通だ」という思い込みが弊害になっているのではないだろうか。

2 学期の終業式前の3年学年集会で『シルエット錯視』という動画をみんなで視聴した。この動画は、上下の軸を中心に、クルクルと回転する影絵が映し出されるのだが、ある人にとっては右回りに、またある人にとっては左回りに回転しているように見える。厄介なのは同じ人でも途中で回転が逆になってしまい、一度反対に回ってしまうとなかなか元の回転には戻ってくれない。（是非、検索して試聴してみてください。本当に不思議。）

数秒間試聴した後に、「右回りに見えた人？」と聞いてみる。だいたい半数の生徒が手を上げた。「左に回っていた人？」と聞くと、また半数が手を上げた。それぞれ手を上げない側の人たちは「なんで？絶対ちがうでしょ？」と、信じられないという表情を浮かべていた。自分が正しいと思っている事と違うことが起きた時の、「受け入れられない」という、まさにその状況そのものであった。

『たった今、みんな同じ動画を見た直後であっても正反対のとらえ方があるんだよね。「言った、言わない」「こう思う、こう思っているだろう」そういう人の感覚、考えだったら尚更、それぞれ違いがあるんじゃないかな。だから、違うことに対して、そう簡単に否定したり、差別したりしてはいけないんだよ。集団で生活するにあたり、正しい判断、思いやる気持ちを大切にしてほしい。』そんな話を続け、今後の人間関係について私の思いを伝えさせてもらった。

学校の醍醐味は色々な人がいる中で、共に学び合えること。自分以外の人が行った良い事を手本にする事ができる。自分が生活する中では失敗しないだろうことも、共に考え、自分の生き方に反映させることができる。違いを認めることができれば、新しい発見が多くあり、互いに成長をしていけると信じている。

やっぱり私は学校が大好きだ。これからも、大好きな学校で、大好きな子どもたちと、大好きな同僚たちと共に学び合えるよう、自分の感覚をいつまでも研ぎ澄ませていきたいと思う。